episode.11

途絶えた文化の復活「黒糖作り」

話し手　中間ガジュマル会　語り部
川崎（かわさき） 太一（たいち）さん（昭和 26 年 1 月 20 日生）

聞き手　鹿児島県立屋久島高等学校 1 年
池田　道人　　久永　琉誠
若松　烈士　　鹿島　天志
日髙　遥星

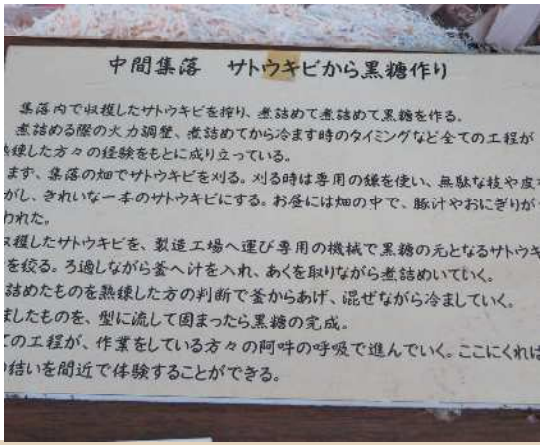
「失われた黒糖を求めて」

僕はもともとは屋久島出身ですが、昭和 39 年に家族で東京都新宿区高田馬場に移住しました。親が定年になったら東京を出て、やっぱ屋久島帰るかって。その後、親の面倒見るために平成 17 年に屋久島に帰ってきた。その時に自分たちがちっちゃいときに経験してるものがなくなってる。その一つが黒糖づくりだった。それを何でやめたんだろうと思ったら、やっぱ高齢化や、商売にならないということが理由でした。じゃあ、自分たちでできる範囲で作ろうと思って、平成 19 年から中間で黒糖づくりをしています。

大昔はどこの集落にも製糖工場があって、最終的には原（はら・はるお）の大きな工場に屋久島中のサトウキビを集めていました。その工場は、屋久島で黒糖づくりでは食っていけず、昭和 45 年になくなりました。それでも集落で細々とやってたんですけども、途絶えていました。僕が帰ってきたときにね。それでやろうと思った。

「農業伝統の継承」

農業伝統。これは非常に難しいですね。だから先を見てどうするかっていう部分なんですけど、例えば種子島や奄美にも結構行きましたけれども、今は結構伝承者が少なくなってて困ってますね。ですから、いかにやりやすい仕事にしていくかっていうことが一番。第一が機械化でしょ。第二に収入源があるってことでしょ。たとえば、今は、みかんなんかもネット販売やってますね。もうそういう時代になってますから。あるいは、全国から『やりたい人』にどんどん呼びかけて、人を集めて集落を作るとか、そういう呼びかけをすることがいいかなと。



「地域おこしをして変化したこと」

地域おこしをして変化したことは、お年寄りが元気になります。お年寄りは若い人に「それはだめやんど」「こうすっちゃんが」って言います。それは、昔若いときに体験してるから、お年寄りが元気になるわけですよ。「んぃやそのやり方はぁだめや」「こうやが、こうやれ、こうせんにゃだめやっと」「しゃべてばっかいでだめや、ほらはよせんかい」こんな風に年寄りが元気になるわけですよ。若い人は、わかんないから「すみません教えてください」っていくじゃないですか。ということでそれはもう最高だと思いますね。

「今後の課題」

黒糖づくりに関しては、まさしく次にやってみたい、あるいは、やりたいって人がいつ出てくるか。僕はちっちゃいときに経験したことが、島へ帰ってきたらなかったんです。いいことは続けたほうがいいね。

キビの根元を耕したり、茎を切る道具